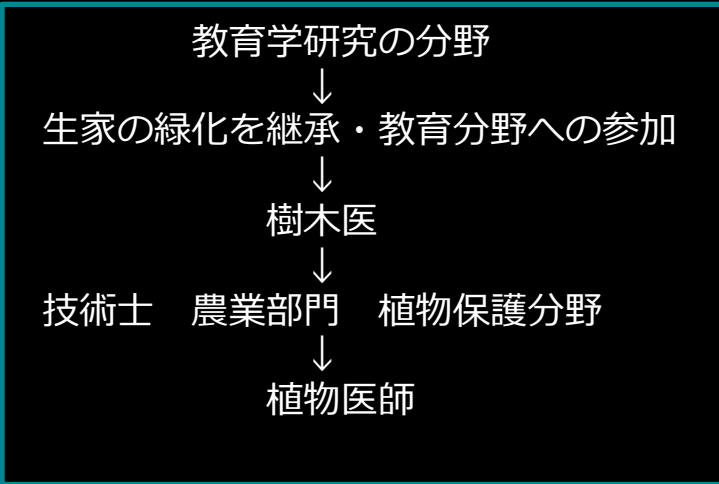


「植物・環境観察会における 解剖手法導入の有用性

発表者： 笹部雄作

専門分野：
技術士農業部門植物保護分野・植物医師・樹木医

出身：
神戸大学 教育学部 教育科学
神戸大学 大学院 教育計画論講座（生涯学習論）





所属学会

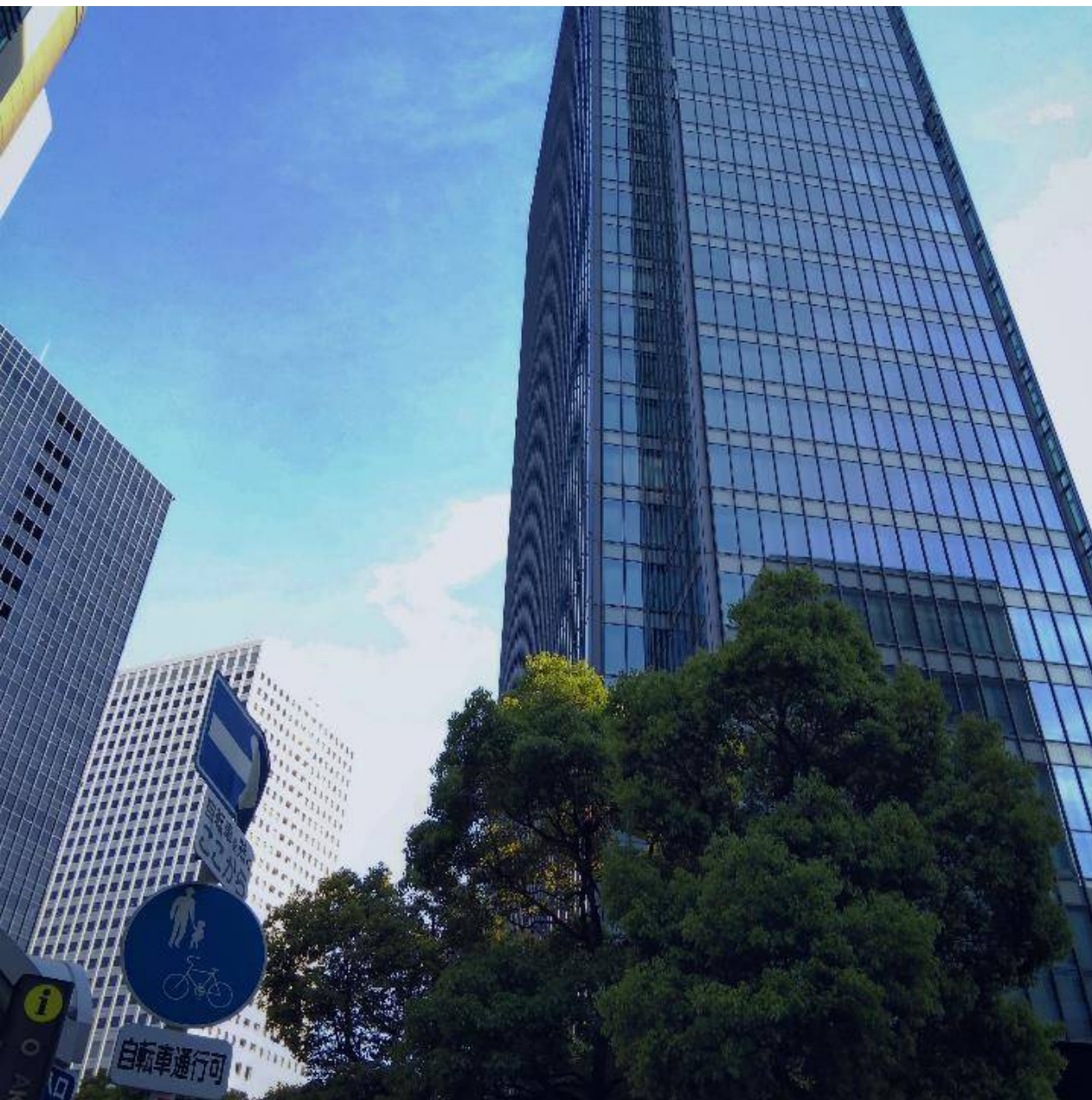
植物病理学会
応用動物昆虫学会
樹木医学会



なぜ樹木を 教育の題材にするのか？

環境問題・生態系・生物多様性といった社会的によく知られる背景

しかしそれ以外に切実な問題があります。



環境は世界レベルの話

でもそれではあまりに遠い話題

もっと身近な問題です。

もっと身近で手の触
れる距離にある日本
の問題

自然の力に抗えなかった長い 歴史

科学の発展と共にやっと対抗する力を得る。

→公害や自然破壊→環境意識の発展

いつの間にか自然を下に見る時代へ
(日本の話です。)



森林破壊？実は放置薪炭林の 緑量は膨張・肥大の一途

拡大する自然保護意識
と

日本の気候・現実的な生態系の食い違い



樹木を題材に自然と人との関係について考える力を育む。

樹木の観察は困難 しかも実感を伝えるにくい

- 樹木は動かない。→ 活字だけの学習
- 学校（教師）側は教室内で手一杯
- 子供は理論と現実を結びつける機会が乏しい



樹木の観察には“高さ”という
壁がある。

屋久杉の上にあるもう一つの森



課題

高い位置の現象・観察を伝えられるのは画像・映像だけだろうか？

課題

画面とガラスを隔てた自然感

このような資料はその場の好奇心をそそりはしますが
どこか遠い世界の不思議話でしかないのかもしれない。

課題

自然の礼賛や興味をそそる..
だけで良いものか？

そして観察を通して参加者に
知ってもらいたい現実があり
ます。

高温多雨の日本と 高緯度エリアの混同



日本は温暖で多雨
その条件下の
日本の自然は弱いのか？



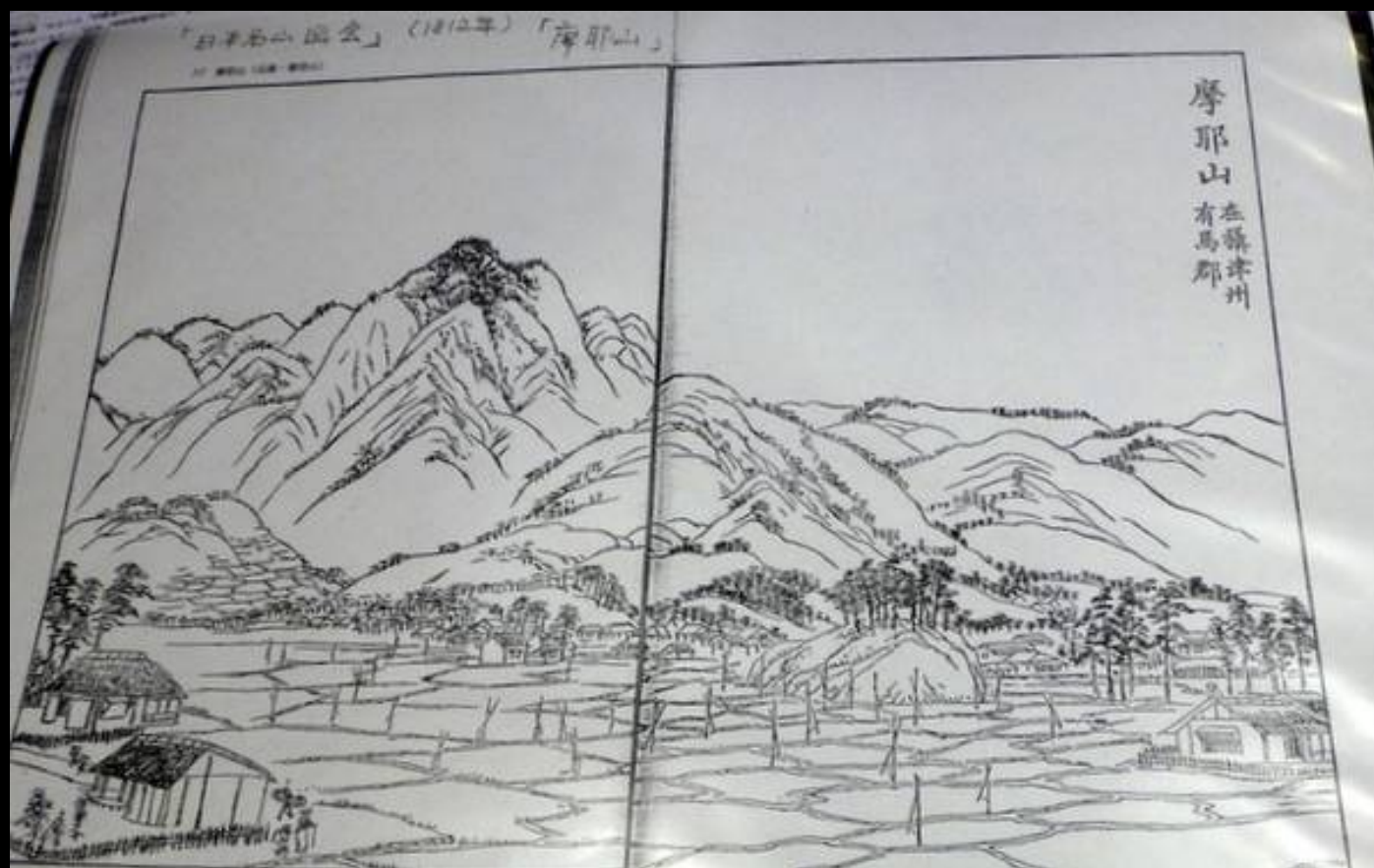
ナラ枯れは究極的には薪炭林の放置に由来



切る伸びる・強剪定は悪？・大きくなる木を一定の空間に

伝えたい課題
日本の緑と文化の実像

- ・ 里山は本来はげ山ばかり



切る・切らないの壁

その一方で木はオブジェでも構造物でもありません。



夕方ムクドリが集まるため
カケヤで殴打されるケヤキ



放任された末に一気に切られるサクラ





これらの背景にある課題とは
日本らしい人と樹木との距離
感を見失っているからではな
いだろうか？

課題

我々は次の世代に樹木をどう
伝えたら良いのか？

自分で考える力

自分で勇気をもって課題に取り組む力

自分で確かめる力

なぜ“解剖”を殊更強調 するのか

子供の理科離れ→現実の現象に踏み込む力の弱体化

植物・樹木との距離を縮めて欲しい。











断面は記録物

